

基本事項

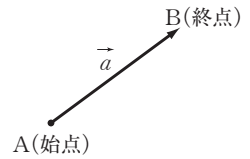
① ベクトルの意味

線分ABについて、AからBに向かうという向きを考えたものを有向線分ABといい、Aを始点、Bを終点という。このような有向線分について、位置を問題にせず大きさと向きだけを考えたものをベクトルという。

右図のようなベクトルを \overrightarrow{AB} , \vec{a} のように表す。

線分ABの長さを \overrightarrow{AB} の大きさといい、 $|\overrightarrow{AB}|$, $|\vec{a}|$ のように表す。

2つのベクトル \vec{a} , \vec{b} の向きが同じで大きさが等しいとき、 \vec{a} と \vec{b} は等しいといい、 $\vec{a}=\vec{b}$ と表す。

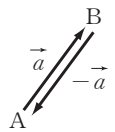


② 単位ベクトル, 零ベクトル, 逆ベクトル

大きさが1のベクトルを単位ベクトルという。

始点と終点が一致したベクトルを零ベクトルといい、 $\vec{0}$ で表す。 $\overrightarrow{AA}=\vec{0}$ である。 $\vec{0}$ の大きさは0であり、向きは考えない。

ベクトル \vec{a} と大きさが等しく向きが反対のベクトルを \vec{a} の逆ベクトルといい、 $-\vec{a}$ で表す。 $\vec{a}=\overrightarrow{AB}$ とするとき、 $-\vec{a}=\overrightarrow{BA}$ である。



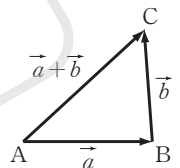
③ ベクトルの演算

(1) ベクトルの加法

2つのベクトル \vec{a} , \vec{b} に対して、 $\vec{a}=\overrightarrow{AB}$, $\vec{b}=\overrightarrow{BC}$ とする。

ベクトル \overrightarrow{AC} を \vec{a} と \vec{b} の和といい、 $\vec{a}+\vec{b}$ と表す。すなわち、 $\overrightarrow{AB}+\overrightarrow{BC}=\overrightarrow{AC}$

特に、 $\vec{a}+\vec{0}=\vec{0}+\vec{a}=\vec{a}$

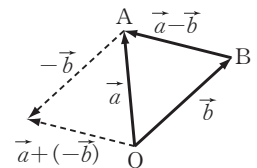


(2) ベクトルの減法

\vec{a} に \vec{b} の逆ベクトル $-\vec{b}$ を加えたベクトルを \vec{a} から \vec{b} を引いた差といい、 $\vec{a}-\vec{b}$ と表す。すなわち、 $\vec{a}-\vec{b}=\vec{a}+(-\vec{b})$

特に、 $\vec{a}+(-\vec{a})=\vec{a}-\vec{a}=\vec{0}$

$\vec{a}=\overrightarrow{OA}$, $\vec{b}=\overrightarrow{OB}$ のとき、 $\vec{a}-\vec{b}=\overrightarrow{BA}$ となる。すなわち、 $\overrightarrow{OA}-\overrightarrow{OB}=\overrightarrow{BA}$



(3) ベクトルの実数倍

ベクトル \vec{a} と実数 k に対して $k\vec{a}$ は、

$\vec{a} \neq \vec{0}$ のとき

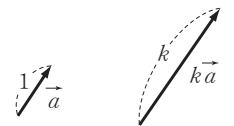
(i) $k > 0$ のとき、 \vec{a} と同じ向きで、大きさが $k|\vec{a}|$

(ii) $k = 0$ のとき、 $\vec{0}$

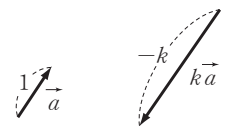
(iii) $k < 0$ のとき、 \vec{a} と反対の向きで、大きさが $|k||\vec{a}| = -k|\vec{a}|$

$\vec{a} = \vec{0}$ のとき $k\vec{0} = \vec{0}$ と定める。

$k > 0$ のとき



$k < 0$ のとき



(4) ベクトルの演算

ベクトル \vec{a} , \vec{b} , \vec{c} , 実数 k , l について、次の演算法則が成り立つ。

(i) $\vec{a}+\vec{b}=\vec{b}+\vec{a}$ (ii) $(\vec{a}+\vec{b})+\vec{c}=\vec{a}+(\vec{b}+\vec{c})$

(iii) $k(\ell\vec{a})=(k\ell)\vec{a}$ (iv) $(k+\ell)\vec{a}=k\vec{a}+\ell\vec{a}$

(v) $k(\vec{a}+\vec{b})=k\vec{a}+k\vec{b}$

④ ベクトルの平行

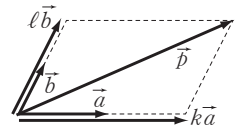
$\vec{0}$ でない2つのベクトル \vec{a} , \vec{b} が同じ向き、または反対の向きであるとき、 \vec{a} と \vec{b} は平行であるといい、 $\vec{a} \parallel \vec{b}$ と表す。

$\vec{a} \parallel \vec{b} \iff \vec{b} = k\vec{a}$ となる実数 k がある

このとき、 $k > 0$ ならば \vec{a} と \vec{b} は同じ向き、 $k < 0$ ならば \vec{a} と \vec{b} は反対の向きである。

⑤ ベクトルの1次独立と分解

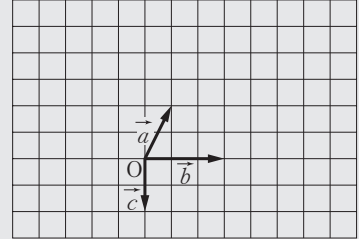
$\vec{0}$ でない2つのベクトル \vec{a} , \vec{b} が平行でないことを, \vec{a} と \vec{b} は1次独立であるという。このとき、任意のベクトル \vec{p} は実数 k, l を用いて $\vec{p}=k\vec{a}+l\vec{b}$ とただ1通りに表される。 $k\vec{a}+l\vec{b}$ を1次結合の式という。



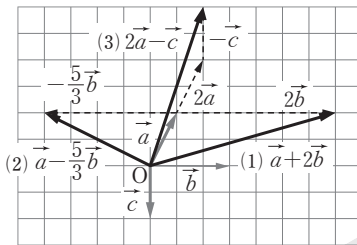
例題 1

\vec{a} , \vec{b} , \vec{c} が右図のように与えられているとき、次のベクトルを点Oを始点として図示せよ。

- (1) $\vec{a}+2\vec{b}$
- (2) $\vec{a}-\frac{5}{3}\vec{b}$
- (3) $2\vec{a}-\vec{c}$



解答



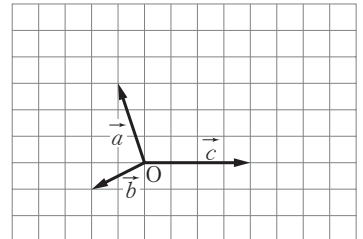
正解へのアクセス

$\vec{p}+\vec{q}$ の図示は, \vec{p} の終点を始点として \vec{q} を作り,その終点と点Oを結ぶ。 $\vec{p}-\vec{q}$ は $\vec{p}+(-\vec{q})$ と考える。

類題 1

\vec{a} , \vec{b} , \vec{c} が右図のように与えられているとき、次のベクトルを点Oを始点として図示せよ。

- (1) $\vec{a}-\vec{b}$
- (2) $-\vec{a}+\frac{3}{2}\vec{c}$
- (3) $2\vec{a}+\vec{b}+\frac{7}{4}\vec{c}$



例題 2

$\vec{a}=\vec{x}+2\vec{y}$, $\vec{b}=3\vec{x}-\vec{y}$ のとき、次の問いに答えよ。

- (1) $2\vec{a}-3\vec{b}$ を \vec{x} , \vec{y} を用いて表せ。
- (2) \vec{x} , \vec{y} をそれぞれ \vec{a} , \vec{b} を用いて表せ。

解答 (1) $2\vec{a}-3\vec{b}=2(\vec{x}+2\vec{y})-3(3\vec{x}-\vec{y})=2\vec{x}+4\vec{y}-9\vec{x}+3\vec{y}=-7\vec{x}+7\vec{y}$

(2) $\vec{x}+2\vec{y}=\vec{a}$ ……① $3\vec{x}-\vec{y}=\vec{b}$ ……②

①+②×2より, $7\vec{x}=\vec{a}+2\vec{b}$ $\vec{x}=\frac{\vec{a}+2\vec{b}}{7}$

これを①に代入して, $\frac{\vec{a}+2\vec{b}}{7}+2\vec{y}=\vec{a}$ $\vec{y}=\frac{3\vec{a}-\vec{b}}{7}$

正解へのアクセス

- (1) ベクトルの和・差・実数倍の計算は多項式と同じように行うことができる。
- (2) \vec{x} , \vec{y} についての連立方程式とみて解く。

類題 2

$\vec{a}=2\vec{x}-3\vec{y}$, $\vec{b}=4\vec{x}+\vec{y}$ のとき、次の問いに答えよ。

(1) $3\vec{a}-2\vec{b}$ を \vec{x} , \vec{y} を用いて表せ。

(2) \vec{x} , \vec{y} をそれぞれ \vec{a} , \vec{b} を用いて表せ。

例題 3

$\vec{x}=2\vec{a}-3\vec{b}$, $\vec{y}=\vec{a}+2\vec{b}$ のとき、 $\vec{x}+\vec{y}$ と $-3\vec{x}-7\vec{b}$ が平行となることを示せ。ただし、 $\vec{a}\neq\vec{0}$, $\vec{b}\neq\vec{0}$ で、 \vec{a} と \vec{b} は平行でないとする。

解答

$$\begin{aligned}\vec{x}+\vec{y} &= (2\vec{a}-3\vec{b}) + (\vec{a}+2\vec{b}) \\ &= 3\vec{a}-\vec{b}\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}-3\vec{x}-7\vec{b} &= -3(2\vec{a}-3\vec{b})-7\vec{b} \\ &= -6\vec{a}+2\vec{b}=-2(3\vec{a}-\vec{b})\end{aligned}$$

$\vec{a}\neq\vec{0}$, $\vec{b}\neq\vec{0}$ と \vec{b} は平行でないから、 $\vec{x}+\vec{y}\neq\vec{0}$, $-3\vec{x}-7\vec{b}\neq\vec{0}$ で、 $-3\vec{x}-7\vec{b}=-2(\vec{x}+\vec{y})$ が成り立つ。よって、 $\vec{x}+\vec{y}$ と $-3\vec{x}-7\vec{b}$ は平行である。

正解へのアクセス

$\vec{0}$ でない 2 つのベクトル \vec{p} , \vec{q} が平行であることを示すには、 $\vec{q}=k\vec{p}$ を満たす実数 k があることを示せばよい。 $\vec{x}+\vec{y}$ と $-3\vec{x}-7\vec{b}$ をそれぞれ \vec{a} , \vec{b} を用いて表すことで示せる。

類題 3

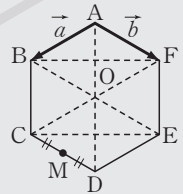
$\vec{x}=-3\vec{a}+\vec{b}$, $\vec{y}=2\vec{a}-5\vec{b}$ のとき、 $\vec{x}+2\vec{a}$ と $3\vec{x}-2\vec{y}$ が平行となることを示せ。ただし、 $\vec{a}\neq\vec{0}$, $\vec{b}\neq\vec{0}$ で、 \vec{a} と \vec{b} は平行でないとする。

例題 4

右図の正六角形 ABCDEF において、対角線 AD, BE, CF の交点を O, 辺 CD の中点を M とし、 $\overrightarrow{AB}=\vec{a}$, $\overrightarrow{AF}=\vec{b}$ とするとき、次のベクトルを \vec{a} , \vec{b} を用いて表せ。

- (1) \overrightarrow{BC}
(3) \overrightarrow{AM}

- (2) \overrightarrow{EC}



解答

- (1) 四角形 ABCO, 四角形 ABOF はひし形である。

$$\text{よって、}\overrightarrow{BC}=\overrightarrow{AO}=\overrightarrow{AB}+\overrightarrow{BO}=\overrightarrow{AB}+\overrightarrow{AF}=\vec{a}+\vec{b}$$

- (2) 四角形 BCEF は長方形である。

$$\text{よって、}\overrightarrow{EC}=\overrightarrow{FB}=\overrightarrow{AB}-\overrightarrow{AF}=\vec{a}-\vec{b}$$

- (3) 点 M は辺 CD の中点であるから、 $\overrightarrow{CM}=\frac{1}{2}\overrightarrow{CD}=\frac{1}{2}\overrightarrow{AF}=\frac{1}{2}\vec{b}$

$$\text{よって、}\overrightarrow{AM}=\overrightarrow{AB}+\overrightarrow{BC}+\overrightarrow{CM}=\vec{a}+(\vec{a}+\vec{b})+\frac{1}{2}\vec{b}=2\vec{a}+\frac{3}{2}\vec{b}$$

正解へのアクセス

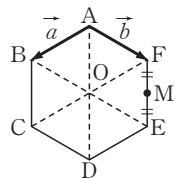
始点から終点までどのようにたどればよいかを考えてベクトルを分解し、それぞれ \vec{a} , \vec{b} を用いて表す。

類題 4

右図の正六角形 ABCDEF において、対角線 AD, BE, CF の交点を O, 辺 EF の中点を M とし、 $\overrightarrow{AB}=\vec{a}$, $\overrightarrow{AF}=\vec{b}$ とするとき、次のベクトルを \vec{a} , \vec{b} を用いて表せ。

- (1) \overrightarrow{FD}
(3) \overrightarrow{AM}

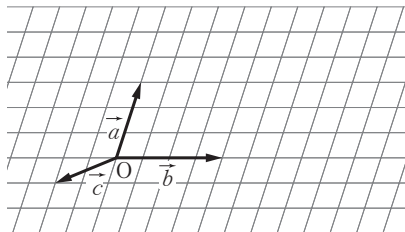
- (2) \overrightarrow{DA}



◆ 演習問題 ◆

1 $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ が右図のように与えられているとき、次のベクトルを点Oを始点として図示せよ。 **例題 1**

- (1) $\vec{a} + 2\vec{b}$
- (2) $-\vec{a} + \frac{3}{2}\vec{b}$
- (3) $\vec{a} + \frac{1}{2}\vec{b} - \vec{c}$



2 $\vec{x} = \vec{a} + 2\vec{c}, \vec{y} = 2\vec{a} + \vec{b} - 3\vec{c}$ のとき、次の問いに答えよ。 **例題 2**

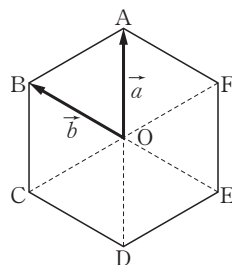
- (1) $2(\vec{x} + \vec{y}) - 3(\vec{x} - \vec{y})$ を $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ を用いて表せ。
- (2) $\begin{cases} \vec{p} + \vec{q} = 4\vec{x} - \vec{y} \\ 2\vec{p} - 3\vec{q} = -2\vec{x} + 8\vec{y} \end{cases}$ を満たす \vec{p}, \vec{q} をそれぞれ $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ を用いて表せ。

3 $\vec{a} = \vec{c} - 3\vec{d}, \vec{b} = -\frac{1}{2}\vec{c} + \vec{d}$ のとき、次の問いに答えよ。ただし、 $\vec{a} \neq \vec{0}, \vec{b} \neq \vec{0}, \vec{c} - 4\vec{d} \neq \vec{0}$ とする。 **例題 3**

- (1) \vec{c}, \vec{d} をそれぞれ \vec{a}, \vec{b} を用いて表せ。
- (2) $(\vec{c} - 4\vec{d}) \parallel \vec{a}$ のとき、 $\vec{a} \parallel \vec{b}$ が成り立つことを示せ。

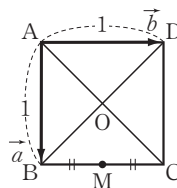
4 右図の正六角形ABCDEFにおいて、対角線AD, BE, CFの交点をOとし、 $\vec{OA} = \vec{a}, \vec{OB} = \vec{b}$ とすると、次のベクトルを \vec{a}, \vec{b} を用いて表せ。 **例題 4**

- (1) \vec{CE}
- (2) \vec{DF}



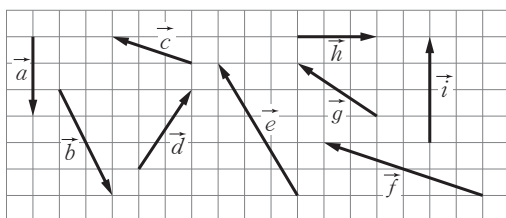
5 右図のような1辺の長さが1の正方形ABCDにおいて、対角線AC, BDの交点をO、辺BCの中点をMとし、 $\vec{AB} = \vec{a}, \vec{AD} = \vec{b}$ とすると、次のベクトルを \vec{a}, \vec{b} を用いて表せ。また、その大きさを求めよ。 **例題 4**

- (1) \vec{AC}
- (2) \vec{OA}
- (3) \vec{MD}



6 右図において、次の条件を満たすベクトルの組をすべて答えよ。

- (1) 互いに平行なベクトルの組
- (2) 大きさが等しいベクトルの組



応用問題

STEP・1

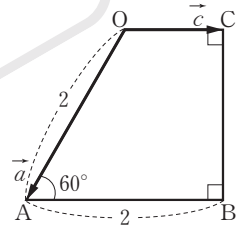
1 $\vec{a} \neq \vec{0}$, x が実数のとき, $x^2\vec{a} = x\vec{a} + 2\vec{a}$ となる x の値を求めよ。

2
$$\begin{cases} \vec{x} + \vec{y} + 2\vec{z} = 3\vec{a} + \vec{b} \\ \vec{x} + 2\vec{y} + \vec{z} = \vec{a} - 2\vec{b} \\ 2\vec{x} + \vec{y} + \vec{z} = 4\vec{a} + 5\vec{b} \end{cases}$$
 が成り立つとき, \vec{x} , \vec{y} , \vec{z} をそれぞれ \vec{a} , \vec{b} を用いて表せ。

3 互いに異なる5点 O, A, B, C, D がある。四角形 $ABCD$ が平行四辺形となるときの, \overrightarrow{OD} を \overrightarrow{OA} , \overrightarrow{OB} , \overrightarrow{OC} を用いて表せ。

4 3点 O, A, B は同一直線上にない点である。点 M は線分 OA の中点, 点 N は線分 AB 上の点で, $AN : NB = 3 : 1$ である。このとき, \overrightarrow{NM} を \overrightarrow{OA} , \overrightarrow{OB} を用いて表せ。

5 右図の台形 $OABC$ で, $\angle OAB = 60^\circ$, $\angle ABC = \angle OCB = 90^\circ$, $OA = AB = 2$ である。 $\overrightarrow{OA} = \vec{a}$, $\overrightarrow{OC} = \vec{c}$ とするとき, \overrightarrow{AC} と同じ向きに単位ベクトルを \vec{a} , \vec{c} を用いて表せ。

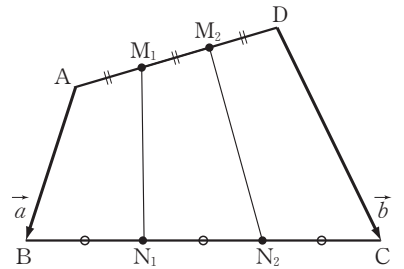


STEP・2

1 四角形 $ABCD$ において, 辺 AD を3等分する点を点 A に近い方から M_1, M_2 とし, 辺 BC を3等分する点を点 B に近い方から N_1, N_2 とする。

$\overrightarrow{AB} = \vec{a}$, $\overrightarrow{DC} = \vec{b}$ として, 次のベクトルを \vec{a} , \vec{b} を用いて表せ。

- (1) $\overrightarrow{M_1N_1}$
- (2) $\overrightarrow{M_1N_1} + \overrightarrow{M_2N_2}$
- (3) $\overrightarrow{M_1N_2} + \overrightarrow{M_2N_1}$



2 右図の正八角形 $ABCDEFGH$ において, $\overrightarrow{AB} = \vec{a}$, $\overrightarrow{AH} = \vec{b}$ とするとき, 次のベクトルを \vec{a} , \vec{b} を用いて表せ。

- (1) \overrightarrow{AD}
- (2) \overrightarrow{GE}

